

短歌

古跡 たずねて

近 田 蕨 声

手送りし羅漢松の枝垂るるその下に惟治
公父子静か眠るゆ (西野御塔で)

小春日に枯草白う長瀬原日輪午塔しずま
りてあり (ある日参りて)

なだらかな稜線をなす塚場千原白雲二つ
寄り添い流る

惟治公越えたる山はあの山か茜さす陽下
あいたいと見ゆ

横柏は老龍がごと山門の土塀は横たい藁
世紀経し (真正寺に詣りて)

菅面伯の元がきし整田の遠景を粉ふく石
原ふんで仰ぎぬ

日比七段色変わるちよう伝説の長池の水
わけて契けし

佐伯湾いたくさいなの如くなる瀬戸岬に
曙光みち一つ

忠魂碑に刻みこまれし吾が歌は拙なまま
まにとはにのこらん

本谷 足田 野 本谷々 貞
佐伯合同基督教会々員
住所 佐伯市下堅町字西野

報告

畑野浦・史談会の発足

先達て大分合同新聞で報道されたように、畑野浦を中心として上下入津の同好者による郷土史の研究は、度々集會地現地調査をつづけ、去年三月十二日は大勢出動して、荒蕪していた清水庵入口の古塔群に手をつけ、残り潤き整地して場所をつくり、二十数基の古塔と苦心協力して整えたり、これはすばらしいことである。実地は手を下して、五輪塔や室町時代のものと思われる墓、元祿期の墓と立て並べてまことに整然と出来ていた。その手ざわらよさに驚いた。これが数年前の夏、史談会が見た古塔かと、おが眼を凝らした。
「為すことによつて学ぶ」という言葉があるが、この人達はこの作業を通して、数百年昔の畑野浦の歴史を学び、そして相携えて今後の調査や研究活動も進め合つたに相違ない。
この様な体験を経て、そして時が満ちてこの畑野浦を中心とした史談会が



古塔の清水庵 (佐伯市畑野浦)
佐伯市畑野浦清水庵の古塔
佐伯市畑野浦清水庵の古塔
佐伯市畑野浦清水庵の古塔
佐伯市畑野浦清水庵の古塔

の日曜日、行方連れて北市長の選挙を語りながら、畑野浦を歩いた。ここに住みついで地方で調査したといふ、その為せば成ることを現実に見て、そして清水庵の後復興建築とその景観調査を、悲願として持つて帰られたのである。
畑野浦史談会、敢えて佐伯史談会の名義に倣つて下さつた由、兄弟関係の史談会として、相携えてこの道に精進したい。
畑野浦史談会は目下会員は十七名だが、尚ほやど加入者があつたらう、という。心からその成長と充実を願うものである。

上下入津の史談会員紹介

去る四月三日、畑野浦が富沢氏より、次の通り大塚十二名の方が、おが佐伯史談会に入会申請のことが来た。これは前記畑野浦史談会が発足以前のことではあるが、双方にまたかつていふ方が多いと思う。ともかくもおが史談会の新勢力として歓迎したいと思ひ、ここに紹介する次第である。
地区別、敬称厚す、○印連絡責任者。

- △ 上野江町西ノ浦
 - 富高宗格 (長江寺住職)
 - 橋本外一郎 (公民館長)
 - 中塚虎之助 (郵便局長)
 - 職員委員 (設計士)
- △ 上野江町新楠水浦
 - 小野九十九
- △ 上野江町畑野浦
 - 富沢 泰 (元上下津村長文化殿調査員)
 - 松木藤作 (伊勢本神社司)
 - 近藤謙三 (清水庵住職)
 - 元本会々員、元常楽寺住職、
 - 富高丈夫 (上野江町教育委員会主事)
 - 山下俊明 () 産業課長補佐)
 - 富高辰平治 (旧庄屋家)
 - 船谷新七 ()

(以上)